

OPU Students 海外留学レポート

Study Abroad Report from the OPU students

「翔け FUDAI! 海外留学!」派遣学生 (2018 年度)

ベルギー・リエージュ大学 交換留学プログラム

大阪府立大学あおがき基金海外留学支援制度「翔け FUDAI! 海外留学!」は、
本学学生の海外留学生を支援し、グローバルに活躍できる力の育成と、
学生自らの経験を学内に還元してもらうことを目的とした、大阪府立大学独自の制度です。
(支援金最大 100 万円)



プロフィール (Profile)

氏名 (Name) 淡中 崇徳
所属 (School) 生命環境科学域 獣医学類
学年 (Grade) 5 年
留学先 (Name of overseas institution)
ベルギー
留学期間 (study abroad period)
2018/10/1~2018/12/27
大阪府立大学留学支援制度
「翔け FUDAI! 海外留学」による留学
記入日 (Date) 2019/1/9

留学レポート Study Abroad Report

1. はじめに

今回の留学は僕にとって大きな挑戦だった。そして留学が始まるのは出国してからではなかったと思う。無論留学は出国してからが本番だが、留学を決めてからの過程も僕にとって挑戦の連続だった。そして振り返ってみて、いい経験をさせてもらったと心から思っている。留学までの道のりも留学中の出来事も多くの人に助けられ、自分なりに行動してみた結果として留学を楽しむことができたのだと思う。大成功と自信をもって言うことはできず反省点もあるけれど、失敗だったとは決して思わない。

2. 留学するまで

僕は3か月間ベルギーのリエージュ (Liège) 大学に留学させてもらった。現地の野生動物がどのような病原体を持っているのかという調査に同行・勉強させてもらうことを目的とした。今回の留学は、僕の担当教員である三宅先生のご厚意によるものだ。留学に行かないか、とお声を掛けていただいたのが研究室に所属して間もない留学一年前の9月頃だった。前々から留学に興味をもっていた僕は二つ返事で答えた。ただし、ベルギーへの留学費用の目安の60万円というのは自力での捻出は難しいので、留学支援金が獲得できれば、という条件になった。それから僕を受け入れてくださった研究室の先生に人生で初めて英語のメールで連絡を取り、受入れの手続きなどをしていただいた。また、国際交流課の方々に相談し、まずは「トビタテ! 留学 JAPAN」という文部科学省と民間企業などが協力して展開している官民協力型学生留学支援プロジェクトに応募をしてみることにした。

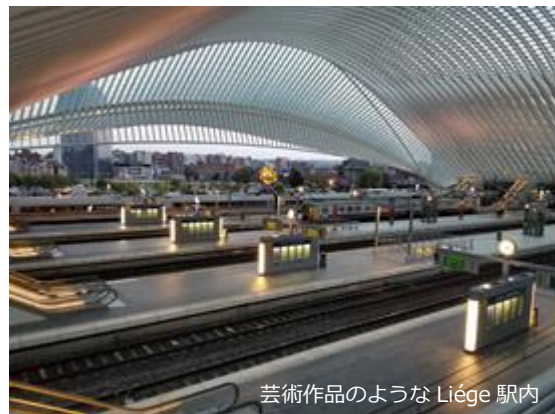
しかし、そこから定期試験や獣医共用試験などに気を取られ、慌てて書類の作成に取り掛かった。三宅先生には叱られつつご意見をいただき、無事に書類審査には合格した。問題はその次の面接試験だった。生



まれてこの方まともな面接というものをしたことがなく、更には自分の考えを公表するというのを避けてきたので自分の考えをまとめ伝える手腕がなかった。結果は不合格。反省点としては野生動物の調査をどのように日本に導入するのか、日本に導入することでどのような利益が生まれるのかという点について考えを詰め切れてなかったことが大きかったのではないかと考えている。また、分からないなら他の人に見てもらうなど他人を頼る努力を怠ったのが良くなかった。しかし、「トビタテ！」不合格者が受けることができる「翔け！FUDAI 海外留学」という名前の通り府大が行っている支援制度に応募させてもらえた。書類は「トビタテ！」のものを使用し試験自体は面接だけだった。一度面接で落ちているので今回も失敗するのではないかと緊張していたが、これには無事合格の判定を出していただけた。正直なところ「トビタテ！」が不合格だった時点で留学をやめようかと思っていたのだが、諦めなくて良かったと思っている。

3. 出発～現地での感想

留学費用の確保にも目途が立ち、準備を進めていた9月に、受入れ先の研究室から僕の面倒を見ることができなくなったと連絡がきた。ベルギーでアフリカ豚コレラが野生イノシシに発生し、その防疫のため当分の間忙しくなってしまったからだ。忙しさが落ち着くまでは三宅先生とも親交の厚い隣の研究室にお世話になることになったため、留学自体が無くなることや暇を持て余すことなどにはならなかったが、当初の目的を果た



芸術作品のような Liège 駅内

すことができないことに不安を覚えた。しかし同時に凄く良い機会だと思った。アフリカ豚コレラは日本ではまだ発生したことが無い、豚とイノシシに感染する病気である。ワクチンがないため発生した場合には甚大な経済的損失が発生し、東ヨーロッパを中心に感染が拡大している重要な感染症である。その制御に関わっている人の話を聞けるだけで



セルクラス像前にて

も獣医学生として十分に貴重な経験となると考えられた。また同じく9月に豚コレラという別の病気だが、病態の似ている感染症が岐阜県で発生しており、それと比較して考えることで非常に有意義な時間を送ることができるだろうと心が躍った。

そうこうしているうちに出国の日になり、慌ただしく家と日本を飛び出した。留学中は目新しいものが多く、刺激的であった。海外はこの留学でまだ二度目だったので日本との違いを見つけるたびに興奮していた。街の建物は装飾がふんだんに施されていて、風変わりな形状のものも多かった。また、街中に教会が多くみられるのも日本では見られない光景だな、と感じた。日本の神社と寺院のようなものだと考えればその多さは変ではないと思うが、不思議な感じがした。特に日本との違いを大きく感じたのは交通機関の不正確さだ。学生寮から研究室まではバスで移動していたのだが、時刻表通りにバスが来た試しがなく、いつ来るか分からないので、早めに行動するしかなかった。また、電車も延着が多かった。一度ドイツに行ったときには一等席（新幹線の指定席のようなもの）を予約していた電車の運行が無くなって、2時間後の電車に乗ることになった。更には乗り換えの電車がなくなってしまったので泣く泣く夜行バスに追加の料金を支払うことになってしまった。ただ、交通の面で良いと思ったのは信号のない横断歩道を渡ろうとしたとき車が止まってくれることだ。日本であれば車が途切れるまで待ち続けることがほとんどだが、向こうではかなりの速度を出していても大半の車が停止してくれた。その分バスなどの交通機関が遅れるのかもしれないが。

他には公衆トイレに使用料が必要だったことに文化の違いを感じた。しかしお金を払っている分手入れは行き届いており、汚いトイレやトイレトペーパーが無くなっていることは無かった。日本では人の善意により無料で様々なサービスを受けていることが多いので、サービスに対してお金（報酬）を支払う文化は質のいいサービスを継続していくためには重要だと考えさせられた。

個人的に辛かったのはベルギーの気候だ。ベルギーの天気はほぼ常に曇天で、たまに晴れか小雨が降ると

いった具合だった。5メートル先が見えないような霧もしばしば発生した。留学中は太陽が恋しく、晴れの日は清々しい気持ちだった。また、雪はほとんど降らなかったが寒さも厳しく、防寒具は手放せなかった。大学の学生寮の暖房器具が上手く働かない時があり、その時はずっと毛布にくるまっていたりした。ただそのおかげか、日本に帰ってきてから寒さに強くなったのは嬉しい。

4. 研究について

研究室での実験は非常に興味深かった。牛の直腸の拭い液から大腸菌を培養して、その大腸菌が特定の三つの病原遺伝子を保有しているか PCR 法を使用して確認するというのをさせてもらった。牛の大腸菌は食肉加工から人へと感染し病気を起こすので人の公衆衛生上において重要であり、獣医公衆衛生学教室に所属していることもあり非常に興味深かった。実験結果として 233 個の拭い液サンプルの 6 割が特定の 3 つの病原遺伝子のうちいずれかを保有しており、その割合の多さに驚かされた。

11 月末頃からはアフリカ豚コレラの防疫活動に参加させてもらえることになった。参加と言っても大学から離れた施設に運ばれてきたイノシシの死体から脾臓や一部の骨などの検体を採取して容器に入れるだけの作業だったが、アフリカ豚コレラ感染イノシシの状態を自分の目で見る事ができ、また感染拡大の状況と行っている対応について話を聞かせていただけたのは非常にありがたかった。やらせてもらえることは何でもさせてもらったが、蛆の湧いた死体に手を突っ込むのには勇気と覚悟が必要だった。必死に手を動かしている時に「Are you OK?」と聞かれたが、3 重にした手袋越しの得も言われぬ感触とマスクを貫通してくる匂いに対応するのに必死で「お、OK」と返すことしかできなかった。



イノシシ死体からの検体採取

5. 観光について

休日にはベルギーの大都市を中心に日帰り旅行をした。橋と川が綺麗なブルージュ、中世の雰囲気を残したままのゲント、「フランダースの犬」で有名なアントワープ、ベルギーの中心都市で多くのチョコレート店が軒を連ねるブリュッセルなど見どころが多く、見ていて飽きることが無かった。

長めの休日がもらえた時にはドイツとブルガリアに行った。ドイツはドレスデンという都市に前述のように電車とバスを使用して行った。ドイツの街並みはベルギーと比べて簡素で、建物の装飾は少なく感じた。しかし、観光名所の建物は細かい装飾や彫刻がありつつ荘厳な雰囲気を漂わせており、ついつい見入ってしまった。十分観光をした後のビールとウィンナーは格別に美味しかった。ブルガリアは飛行機を使用して一度ルーマニアまで行き、そこからルセという都市までタクシーで向かった。人口密度が高くなく、華やかだが穏やかな場所で、帰路に着くまでの時間をゆっくりと過ごすことができた。歌によく出てくるドナウ川を見ることができたのもとても感慨深いものがあつた。

また、留学最後の週はクリスマスで大学が休みだったので、オーストリアのウィーンとドイツ南のザクセン・スイス国立公園へ日本人の友人と観光に行った。ウィーンでは有名なウィーン少年合唱団が参加しているミサを聞くことができ、ヨーロッパのクリスマスを十分に楽しむことができた。ザクセン・スイス国立公園は大自然と人工物が調和した美しさに感動した。



ルセのオペラハウス



大自然を感じるザクセン・スイス国立公園

6. 最後に

留学前は留学支援金をいただくのに苦労し、留学生生活を思っでは不安に駆られ、留学中は自分の活動について振り返る余裕がなかった。しかし、今振り返ると非常に充実した3か月間だったと思う。当初の目的は果たせなかったが様々な経験を積ませていただき、心が震えるような景色も見ることができて、ベルギーで友人もできた。それもこれも三宅先生や国際交流グループの皆様、家族、研究室のメンバー、留学中に会った人たちのおかげだと素直に感謝の気持ちを感じることができる。今後はまた日本の研究室生活に戻るが、この経験を自分の将来に、そして他人や社会のために生かしていきたいと強く思う。